



12月号

ひだまり

今月のエッセー

言葉の前に欲しいのは



先輩にお子さんが出来ました。表には出さないものの、初の我が子の出生を楽しみにしているのは明らかでした。

しかし、出産を間近にして子どもが容体が急変。産まれましたものの、声を上げることは一度もありませんでした。

しかし、周囲の人たちは喜ばしく尋ねてきます。「赤ちゃん、どうだった？」と。そしてその都度、事のいきさつを説明しなければならなかったようです。

悲しみに苛まれる様子を見て、周囲は慰めの言葉を掛けていました。しかし、私は何も声を掛けませんでした。それには私なりの理由がありました。

というのも、その先輩の気持ちを解つたつもりになって勝手な言葉を掛けるべきではないと思ったのです。

悲しんでいる人がいたら慰めの言葉を掛ける、これは妥当な選択なのかもしれませんが。しかし、自分がその人に対して言葉を掛けるに足る状態にあるのか、つまり、それ程に先輩の気持ちを理解しているのか、その時の私には疑問だったのです。更に言えば、そもそも人の悲しみや喜びといった気持ちは、本当に他人に理解し得るものなのでしょうか。

ある人はこう声を掛けていました。「今は悲しいかもしれないけれど、きっと時が解決してくれるはずだよ」と。

もちろん、慰めの意図があったのでしよう。言っていることも正論です。しかし、そもそも先輩は慰めて欲しかったのでしょうか。そこにも疑問は残ります。

言葉を掛けるべきだったのか、はたまた私の様に何も声を掛けなくてよかったのか、未だ知る由もありません。しかし、いずれにせよ言葉する以前に「相手を慮る気持ち」こそが大切だ、そう思わされたのでした。

◆田代浩潤

修行体験記

「じじいの掃除」



曹洞宗のお寺では、お手洗いのことを「東司」と呼びます。私が修行いたしました永平寺では二百人近くの修行僧が生活していますので、様々な場所にこの東司があります。そして、その東司を掃除するのも修行僧の務めです。

私が永平寺に入って一か月ほど経ったある日、数人の修行仲間と東司の掃除をしていました。

「きれいなところは時間かけて掃除しなくてもいいから、汚いところを重点的にやろう。」

徐々に永平寺での生活に慣れてきて私は、効率よく掃除を終わらせる

ために仲間とそんな話をしていたのです。すると、話を聞いていた先輩の和尚さんが突然入ってきて私たちにこう言いました。

「ばか者！掃除は単なる仕事じゃなくて大事な修行なんだ。見た目がきれいだったら掃除をしないというものじゃない。たとえきれいに見えても、手を抜かず丁寧に掃除をする。そうすることで、自分のところにたまった塵を掃除し続けるんだ。見た目ばかりにとらわれるな！」

この先輩の一言で、修行としての掃除（こころの掃除）に気づくことができたのです。

◆竹村信彦

編集後記



やって来ました、来てしまいました十二月。この時期になると「一年は早いなあ」とつい嘆いてしまいます。

思えば子どもの頃、二十七歳(私の年齢)と言えどももういい大人、人生の酸いも甘いも知った「オジサン」の一步手前だと思っていました。しかし現実はどうでしょう。人生の「じ」の字も知らないだろう今の私。

そこで、とつくに「オジサン」の年齢に達している両親に「ふたりはどう感じているの？」と聞いてみました。

「私達はまだ二十歳の気であるよ。」

私よりも気だけは若い両親に、根拠はないけれど確かな勇気をもらった気がしました。

◆畔柳公潤

発行 曹洞宗総合研究センター教化研修部門

〒一〇五・八五四四

東京都港区芝二・五・二曹洞宗事務庁内

☎〇三・三四五四・六八四四

法のお話



三年度
なかのたいしゅう
中野太秀

『縁が実る』

この間結婚式に行ってきました。式は教会ではなく寺院で行ういわゆる「仏前結婚式」で、寺院の厳かな雰囲気の中で執り行われました。仏前結婚式は宗派によって様々な違いがあり、私が行ったのは浄土宗式の結婚式でした。その式の途中で新郎新婦は花を仏前に捧げるのですが、七本用意された花から、男性は五本を、女性は残りの二本の花を仏前に捧げて結婚の証とするのです。これはお釈迦様の前世物語が由来となっています。

それは次のようなお話です。

ある国の王様が仏様にお花を供養すれば大きな功德を得られると聞き、国中の花を集めるように御触れを出しました。

その国にいた一人の青年もまた、仏様に花を捧げようと思いました。しかし、国中のお花は王様に集められいくら探しても見つかりません。

それでもなんとか花を見つけようと探しつづけます。すると、仏様に花を捧げようと七本のお花を隠すように持っていた少女に出会います。青年は全財産と引き換えに五本だけ花を譲ってくれないかと懇願しました。はじめは断る少女も、青年の真摯さに心を打たれた花を譲る決心をします。二人は仏様のもとにおもむき、青年は五本、少女は二本の花を捧げたのです。

後に結ばれて互いに助け合っていくこの青年と少女。この二人こそが、お釈迦様とその妃になるヤシヨダラ姫の前世だったとされています。

仏前結婚式では更に、「二人が結ばれる良い縁は、偶然ではなく「縁」によって結ばれる。」といった言葉も述べ、「縁」といったものを主眼に行います。「縁によつて結ばれた」「縁に決められている」と聞くと、二人の出会いがどこか自分たちの力ではなく、他人事のように感じてしまい、どうにも釈然としないと感じ

じる方もいるのではないのでしょうか。

「縁」とは、ものごとは様々な関係性によって成り立っており、その様々な原因が絡み合つて結果が起こるということです。ものごとの起り方は、偶然ではなく必ず原因というものがあるのです。結婚式は二人を祝福するためのものです。しかし仏教では、二人が出会えたのは、二人を産んだ両親、兄弟や祖母、数え切れないほどの多くの人たちの関わり合いの結果であることも意識してもらいます。私たちが今ここにいる縁、二人が出会えた縁、そして結ばれた縁。こういった「縁」は、ただ二人の力だけでは成すことはできません。二人が今生きているこの社会、それぞれどこか二人が生まれる以前からの様々な要因によって今の瞬間があるのです。そういった全ての「縁」に感謝の気持ちを持ってもらう。それが仏教での結婚式です。

私たちが今行う自分の小さな行動が、遠い未来に大きな「縁」へと実る。そのことを肝に銘じて過ごしていければ、ほんの小さな行動の一つひとつが大切に思えてくるのではないのでしょうか。

いろんな仏様

『阿修羅』

あしゅら



今回ご紹介するのは阿修羅です。一般的に三つの顔に六本の腕をもつ三面六臂で表され、恐ろしい形相をしています。阿修羅は戦いの神としてのイメージをもたれており、激しい争いの場を「修羅場」と呼ばれているのはみなさんもご存知でしょう。

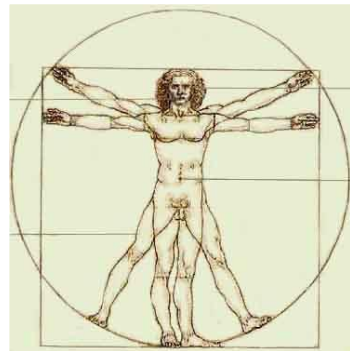
阿修羅像の代表的なものには奈良県、興福寺の阿修羅像がありますが、これは一般的な阿修羅像とは一線を画し、落ち着いた優しい表情をしています。阿修羅は帝釈天（ブツダ）が悟りを開いた時に力を貸した神）と常に戦う悪鬼神とされていますが、ブツダに諭されて改心してからは、仏教の守護神となりました。興福寺の阿修羅像の三つの顔はそれぞれ表情が微妙に異なり、その時の心の変化を表わしています。

この仏様、実はファンクラブがあるほど人気がある、魅力ある仏様なのです。

◆ 國生徹雄



私の〇〇自慢



『マッサージ』



私は、マッサージが得意です。マッサージが得意になったきっかけは、大学時代に腰を悪くしたことからでした。自分の調子を良くしたいという思いから、全身のつぼやケアの仕方が載っている本を買って勉強をすることに。その結果、独学ながらもある程度の知識を得ることが出来ました。

ある日、そのことを友達に話したところ、「試しにマッサージしてみてください。」ということになり、やってみると気持ち良かったらしく大変喜んでくれました。それ以来、これはコミュニケーションツールとして役立つのではないかと思い、友達や先輩の要請があれば積極的にやってみることにしたのです。

そのおかげで、今では自分のケアのみならず、他者へのケアやマッサージを通じた会話も弾みたいへん役立っています。

◆ 田中仁秀